

令和3年5月5日発行(毎月5日1回発行)
第61巻5月号(通巻742号)

風土



5

文 反 古 の 灰 の た だ よ ふ 夕 牡丹

後に「風土」の編集を務めた手塚美佐氏が、『石川桂郎集』（俳人協会刊）でこの句を採り上げ次のように述べています。「桂郎は私に、俳句よりは散文が書きたいと胸の内を語ってくれた。左翼思想の青年たちとかかわった二十代、床屋をつぶすに至った三十代、市井彷徨、酒、恋、赤貧。この句を口ずさむと桂郎の志す散文の世界が見えてくる。」若き作家たちとの緊密な交流があった時期でもあります。着流しで蓬髪桂郎師が、「夕牡丹」を前に反古を燃やす姿は、まさに文士です。

太 宰 忌 を 妻 に 言 は れ し 後 の 蛩

（句集『含羞』より昭和二十四年作）
太宰治は前年の昭和二十三年六月十三日に、玉川上水で入水自殺しています。酒を酌み、文学談義を交わした桂郎師にその死はいかばかりだったでしょう。その忌日を妻に先に言われ、はつとしたのです。その夜の蛩を太宰治の魂と見つつ。

蝸 牛 光 悦 垣 の 大 う ね り

（句集『月の道』より平成十七年作）
「光悦垣」は、本阿弥光悦が考案した竹垣で、牛が伏せているような独特の勾配があります。光悦は、京都の鷹ヶ峯の地に一族郎党を引き連れて移り住み、一大芸術村を作りました。現在では光悦寺がその面影を残しています。器師は京都に赴いた時、光悦寺を訪れたのです。その「光悦垣」の印象を「大うねり」と称賛しました。まるで動き出しそうな表現に器師の感性の冴えを感じます。取り合わせに「蝸牛」を置き、「大うねり」に揺れる小さな蝸牛を想像させています。

泉 打 つ 風 の し つ ぽ の 唄 ふ か な

（句集『月の道』より平成十七年作）
この句は、器師の俳句理念の「命二つ」をさらに突き抜けたような軽やかさがあります。実際には強風が泉の面を波立たせたただけのことです。しかし器師は風に感情移入し、「風のしつぽ」が泉の面を叩きながら「泉さん起きなさいよ」と唄っていると、風に同化して表現したのです。

春の雷

南うみを

荒東風や貝殻まじる磯の畑
畝の間のうすらひ割つて堆肥場へ
蜷の道こはさぬやうに畑へ水
畝作る野梅の股にスマホ乗せ
まんさくの暮れて枯木にまぎれ込む

鯉にまだ水の重たき春の雷
ふきのたう棚田の水はつつ走る
巫女の振る鈴かあしびの鈴の音か
蓬生へ飛ぶ直会のひねり餅
直会や春泥の靴うち並べ
駅までをなづなの花に屈みもし
さざ波の光となりてさより寄す

(ウエップ俳句通信121号掲載句と一部重複)



竹間集

同人作品



冴返る

林 いづみ

きさらぎやロイヤルブルーのインク壺
江ノ電の車窓より享く木の芽風
青竹に供花果樹園に鳥の恋
師在さば白寿脊山に聴く初音
ひとたびは胸に抱きて雛飾る
一葉は安房の菜の花辛子と和へ
武蔵野の水面の戻り冴返る

夜の梅

間島あきら

春一番「素粒子」欄に真砂女の句
「完売」とパン屋の真昼水ぬるむ
梅吹雪く舟形屋敷舳のあたり
塗り皿を鶯餅の翔つ気配
摘み草や母の取り出す肥後守
こぼれたる土筆の胞のあさみどり
放たるる真砂か蝶か夜の梅

月の暈

内藤 静

白梅や月はおほきな暈を被て
鎌倉五山うぐひすを惜しみなく
古株を褥としたり名草の芽
末黒野をつるぎの如く川一本
木々芽吹くここにかしこに降魔札
焼野を来る庄面^{べしみ}のやうな顔をして
恋猫のここぞと効かす小節かな

つらつら椿

小林共代

酒中花は波郷の椿明日は咲く
坂の急つらつら椿風を呼ぶ
神楽殿の風より翔ちて鳥帰る
春禽の影うつしけり大玻璃戸
啓蟄の青葉の育つ屋敷畑
奥庭の崑崙椿人を寄せ
山笑ふ田畑宅地となつてをり

春兆す

中根 美保

藍甕に鳴るタイマーや春兆す
水明り時にさゆらぎ盆の梅
花木瓜を殊に見よとて苑の主
風よりも時に速しよ春の水
一脚の失せたる筥や雛納め
座布団の縁すべりたる子猫かな
押し戻す力たしかに種袋

風 花

土井ゆう子

一席づつ空けたる椅子の寒さかな
着膨れてことさら背骨頼りとす
日脚伸ぶマトリョウシカの大から小
母の忌の四温のうちに過ぎにけり
冬行くや終りて欲しきこと未だ
風花や舌に溶けゆく和三盆
終息のあてなき日々や冴返る

二月の風

森高 武

のしのしと大白鳥の寄つて来ぬ
餌欲しき大白鳥の怪訝顔
下萌の土手陥没す地震の後
黒松の立枯れ二月の風の中
早春の渚の砂に足取られ
河口まで続く野焼の河川敷
強風の野焼帰りの消防団

花の種

浜 福恵

いぬふぐり湖畔の春を足元に
梅畑湖の鶉が来て羽を干す
北の空白山霊峰雪を被て
「春蒔種」ふるるファームに幟旗
赤一色にはつか大根の種袋
夏から秋の仏花ぞ花の種を買ふ
ミモザ咲くファームに展ぐ昼餉かな

うかれ猫

門伝史会

年の豆掌よりこぼるる齡となり
梅二月磨き抜かれし夜空かな
露のたう母に繋がること多し
梵鐘の一打の余韻木の芽晴れ
梅が香にすつぽり埋まり汀女句碑
遠藤道子様
人知れず逝きしを悼む梅真白
路地奥に銀座稻荷やうかれ猫

薄 氷

鈴木石花

春浅き客三人の路線バス
凍返る来てすぐ戻る救急車
平凡より平易佳してふ薄氷
捨て難き衣も余寒の芥袋
海近き吾子より届く白子干
朝の膳梅ひと枝の香りきく
路地裏の川に吹かるる猫柳

春の月

山田 暢子

紅梅にしばらく眼遊ばせて
封筒を秤にのせて春隣
下萌のあたりは踏まず歩を拾ふ
若草に陰と日向がありにけり
草萌ゆるここにベンチが欲しくなり
てのひらに刻む歳月四温かな
明日もまた同じ日の来る春の月

露のたう

岩木 茂

大寒の水もて磨く杉丸太
墳山の土が息する雪解靄
笹鳴やはらりと散りぬ竹の雪
如月の光悦垣のうねりかな
灯点りて顔めける家鬼やらふ
水しづか背中合はせの坐禅草
萌いろの展ぐる芯に露のたう

さくら餅

小林 輝子

田も畑も雪の下なり年端月
白鳥の胸の汚れは帰心とも
帰るさの白鳥の声振りかぶる
雪を消す土一トンの篩かけ
座禅草三つ四つ句座のごと出づる
さくら餅夫の遺影の前に置く

一番若布

田中佐知子

引き上げて弾く海光一番若布
雪道を潮垂れ若布の一輪車
若布百貫洗ひし蜚の滴りぬ
雪嶺を乱して浅蜷舟揺らぐ
二段目は夫の抽斗種袋
薄紙をとれば息づく土雛
あたたかやマトリョウシカの子沢山

木々芽吹く

中村 洋子

宿り木は丸く吹かれて木々芽吹く
空に画布ペン画のやうな木の芽かな
地の色に雀散らばる二月かな
浅春の中に少女期あるやうな
銀座には恋猫の路地ありにけり
雪虫や雁木の町は戸を閉ぢて
蜆採る舟の遠近湖光る

干し野菜

橋添やよひ

干し野菜箆に彩おき春立てり
浅春や声をおとして人と逢ふ
鬼蜆入荷す砂利の音を立て
初午や値切り上手に売り上手
寒天小屋湯気の中より一輪車
糴函に氷見の焼き印雪しまく
雪解風をどる鵜の瀬の川しまく

春の鴨

浅田 光代

下萌や山羊のピンクの鼻の先
恋猫の毛づくろひせる舌の音
大王墳ことに後円さへづれる
照り翳りして落椿おちつばき
考へるベンチや山毛櫨の木々芽吹く
みちのくへ空はつながり花辛夷
草の上の日ざし啄む春の鴨

風光る

柿沼 盟子

立春のあんぱんのへそ深くあり
引き戸あく音に重さや春の鵲
踏みしむる焼野の端の草とがり
草の芽や畑に幾重も柵立ちて
風光る在宅勤務を抜け出して
雛飾る煎餅店の低き柵
山茱萸の黄を濁らせず疾き雲

初 雀

高村 令子

生も死も一文字で足る大旦
天命の余白いつまで初雀
ニタ三言身のあたたまる御慶かな
薄氷二・三步戻り踏んで見る
凧に影まで吹かれ下校の子
メモ積むも生きる力や冬木の芽
来る日より去る日いとほし冬帽子

辛夷の芽

土井 三乙

春立つやふるさは雪七尺と
黒塀の路地に人呼ぶ春の雪
城址の起伏を見せて残る雪
一山を泛べて深き雪解靄
うすらひや硝子戸閉めて和菓子店
朝市の蜆出所を問はれたり
遠景に海を置きたる辛夷の芽



山河集

同人作品



南うみを選

白菜を包むや英字新聞紙
立春の夢のひとつに雨の音
ふらここの止みて一氣に暮れにけり
やはらかき畦火となりて子が叩く
卒業児校歌の川を一つ飛び

山田 健太

お謡ひを聞いて恋猫うなりだす
立春のサラダに散らす茹で卵
山笑ふ傘寿四人で撞木ひき
殉教の島の椿の咲く頃か
春浅し匂ひ変はらぬ父母の家
結界として雪解雫の伽藍
落ちさうで落ちぬ古巣よ電車過ぐ
梅剪定根元に枝のうづ高く

奥田 茶々
谷田明日香

風土独語／南 うみを



ふらここの止みて一氣に暮れにけり
山田 健太
さつきまで公園でブランコに興じていた子供たちが家路につきました。賑やかな子供たちの声が消え、またたくまに公園に夕暮れが迫ってきます。この後公園は夜の静けさに包まれます。「止みて一氣に」が、読み手の想像力をくすぐる佳き句です。

まんさくやピロピロ笛の弾けやう
津川かほる

「ピロピロ笛」は巻いた紙筒を吹いて伸ばし、戻して巻く玩具です。作者は「まんさく」の咲き様を「ピロピロ笛」が弾けた様子と重ねました。「まんさく」の紙のような質感からも領けます。

しんしんと過去降りつもる霜夜あり
磯崎 啓三

「しんしん」は静まり返った様、寒さが身にしみる様に使います。「しんしんと雪」がありますが、作者は「しんしんと過去」と置いています。まるで「雪」のように来し方の記憶が蘇っては、脳裏に積もっていくのです。「霜夜」なればなおさらです。

結界として雪解雫の伽藍
谷田明日香

「結界」は仏道の妨げにならぬよう、僧俗の境界を設け、入る

檻罌を遠巻きにして路の蔓
御山より雲沸くごとし花辛夷
茅葺きの本堂背に南京梅
兄の忌に馳せ行く架橋春北風
春うらら嬰のあくびも泣き顔も
野焼きして昨日と違ふ風の音
夢語る明るき海や菜の花忌
薄紅梅一鉢分の香りかな
なぎなたを背負ふ少女や梅二月
ポップコーンのごとく弾けて梅の花
鶯や庭より見ゆる海光る
うこん布で古伊万里包む二月かな

松本 胡桃

ことを許さない処です。作者は伽藍からとめどなく零れくる「雪解雫」を結界と見なし、それ以上は踏み入れない処と感知したのです。敢えて句またがりを用い緊張感を出しました。

長鳴きを覚えし仔牛春の屋
菅原 末野

春の日射しを浴びながら、牧場で長鳴きする牛を聞くといかにも駑蕩とした気分を味わいます。この仔牛も親を真似て長鳴きができるようになりました。「春の屋」がますます駑蕩感を演出しています。

野焼きして昨日と違ふ風の音
三好 康子

「野焼」は土地を肥し、害虫を駆除するために、野や土手を焼くことを言います。焼いた後が「末黒野」で景色が一変します。そして芒など風になびくものが無くなるので、「風の音」も違ってくるのです。作者はその変化を聞き逃さなかったのです。

山火いまカルスト大地駆け上がる
奥田 茶々

この句は「カルスト大地」から山口県の秋吉台を想像します。この山焼きは灌木などが生えないように毎年行われます。広大なカルストの麓から、一氣に火が燃え上がる様子が「駆け上がる」で言い留められています。

風土集



南うみを選

二月来る器先生誕生日 川崎 津川かほる

まんさくやピロピロ笛の弾けやう
迫りくる大室山の末黒なる
古民家の土間の光や冴返る
花嫁に朱傘かざしぬ木の芽晴れ
どうと来てがうと去りゆく木枯は 三 豊 磯崎啓三

木枯の山に抱かれ衰へぬ
しんしんと過去降りつもる霜夜あり
茶碗みがく霜夜の息を吹きかけて
煉切の菓子のももいろ春隣 静岡 菅原末野

野辺に咲く花みな小さし戻り寒
蝶の入るデイサージスの遊戯の輪
長鳴きを覚えし仔牛春の昼
山葵田を逃るる水や為朝忌

山火いまカルスト大地駆け上がる 東京 奥田茶々

恋猫の喰りは地震にはたと止む
海鳴りに凜と越前雪中花
白梅や急降下する鳶の風
新駅の「合格」「門出」木の芽張る
大根飯釜の湯気ごと運ばるる 川崎 森田節子

止め腕に手鞠麴うかぶ梅二月
板長の給仕にまはる春の宵
早春の鍋にパスタの華ひらく
春の雪こととブイヤベースかな
商ひの声軽やかに春隣 五條 上辻蒼人

数の子を噛む幸せに歯も耳も
手袋をはづし一円拾ひけり
一病のからだ愛ほし冬帽子
大とんど火は怒りとも祈りとも